



環を閉じたように私には思えます。

## 2. SDGs から見た桃李科の意義

日本のユネスコスクールは、文科省からESDやSDGsを推進することも求められています。小学校では、2020年度より「桃李科」を開始いたしました。2018年度に道徳を教科とすることを決定し、2019年度は全教員でカリキュラムを作成し、足掛け3年の大仕事でした。昨年度桃李科カリキュラム作成委員会が掲げた3つの柱は「平和・環境・共生」で、正にユネスコスクールの精神や時代の精神と共鳴しています。この柱を中心に、伝統的に行っていた心の教育、文科省が求める道徳の22の指導項目、22の指導項目に当てはまる全教科の実践、高学年の話し合い活動、子どもたちの世界観を広げ協働の力を高めるワークショップなど多岐にわたる内容を含み、次の時代を担う実行力と共感力を育む教科指導を目指しています。

今年度、全教員が桃李科研究授業を行いました。「考え・議論する」ことをテーマとして4つの分科会に分かれ、事前指導案検討、授業研究を重ね

てきました。単なる徳目にならないように、どの教員もそれぞれテーマの切り口、主発問に工夫を求められました。私も可能な限り研究授業を参観しました。授業での子どもたちの創り出す空間は、時に伸びやかで時に森とじていましたが、温かな空気が流れていました。互いの心の持ちようを言葉にする時、空間の温かさは大きな助けになります。知見を広め、意見の交流で考えを深め、正に共生に繋がる時間を自分たちで紡いでいたのです。このような時間の重なりが心を育てていくのだ、と桃李科の目指す姿を垣間見ることができたと喜んでいました。

私も12月に1年と2年の1クラスずつに授業をさせてもらいました。授業名は「きもちのうみをあじわう」です。校長として3年間様々なトラブルに対応してきた、言語化の大切さをしみじみ感じていました。

東京学芸大学の大河原美以教授は「感情に関することは大脳辺縁系（主に扁桃体）の仕事なのです。大脳辺縁系から湧き上がってくる不快感情は、安心感安全感という感情が同じ大脳辺縁系から喚起されることによってしか収められないので



図1 「きもちのうみをあじわう」の授業風景

す。つまり、子どもの感情コントロールに関する脳の機能が健やかに発達するためには、不快感情が承認され、言語化されるという大人とのコミュニケーションによって、安全感・安心感が喚起されるということが、絶対に必要なのです(子ども防犯ニュース付録：連載「子どもの問題行動への対応—教師がすべきこと、できること」2007年4月号)」と述べています。

「嫌な気持ち(不快感情)も大事な自分」を感じることを「きもちのうみをあじわう」のテーマです。授業では、自分の気持ちを色紙に書いて写真のように中央に置いていきました。青系はいい気持ちの海、赤系は嫌な気持ちの海です。出そろったところで、両方の海を眺めてから、赤い塊の海を布で覆い、「この気持ちをなくしたほうがいいですか?」と聞くのが主発問です。

1年生も2年生も考えを出しあってくれました。なくす、なくさない、両方の意見が出ましたが、特に印象的であったのは、最後に手を挙げた1年生女の子が「なくしちゃうと…」と言いついたことでした。心の中に湧き上がる様々な感情の半分を隠してしまう、という視覚的な印象に対する違和感が、自分の心を狭めていく、という思いにつながって、そこに戸惑いとして表出されていたように感じたのです。「変な感じだということ?」と聞くと静かに頷きました。気持ちと体の親和性、その子はすべての気持ちを受け止めてもらっているのだということも、伝わりました。

1年の男の子は日記に「とうりはいいじゅぎょうだとおもいます。なぜかという、いっぱい気持ちのこともしれたし、かみにかいて、ちょっといやな気持ちですっきりしたような気がするからです。またやりたいです」と書いていました。大河原教授の言う「不快感情が承認され、言語化される」プロセスをこの日記から読み取ることができます。授業後に「気持ちよかった」と子どもたちが発言していたことも、安心感の中で取り組めたことが伺われてうれしいことでした。

私たちの学校は、中村春二先生の建学理念のもとに、実践的な教育活動を積み重ねて今に至ります。桃李科はその中でも心の教育の部分を更に推し進め、より人格教育を深める契機となっていくでしょう。中村春二先生の次男、浩氏は『成蹊教育——その源流と展開——』において「創立精神の継承は盲従的継承ではなく、進化の法則に従う発展的継承でなければならないのである(p.150)」と述べています。桃李科は100年後の私たちからの発展的継承の提案と言ってもよいでしょう。先に述べたように、桃李科の目標とSDGsは響きあっています。SDGsを実現する未来に繋がる教育にしていきたいと思います。

[付記] 本稿は、成蹊学園サステナビリティ教育研究センターリレーコラム(11)(2020年2月26日web掲載)の記事を本誌に再録したものです。